

## 実践報告

日本語教師を対象にした、キャリアデザインの考え方を  
取り入れた「進路指導セミナー」の試み愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員  
阿部 夢(董 夢)

## 1. はじめに

日本では近年、「外国人留学生」(以下、留学生)が年々増加し、2018年5月末時点で298,980人と『留学生30万人計画』<sup>1</sup>の達成が間近に迫っている(日本学生支援機構, 2019a)。国別にみると、中国(38.4%)、ベトナム(24.2%)、ネパール(8.1%)の上位3か国を含めてアジア地域からの留学生が7割に達している。日本学生支援機構によれば、こうした留学生のうち「日本語学校」で学ぶ者は2017年時点で78,000人にのぼり、留学生全体の3割を占めるに至っている。さらに、2012年から2017年にかけて留学生数が1.6倍に伸びるなか、日本語学校で学ぶ留学生は3.3倍に増加した(日本学生支援機構, 2019a)。その背景にあるのが「非漢字圏」からの留学生の急増であり、日本語学校では実に6割が該当する。このような状況は、『留学生30万人計画』のもとで留学生の増加を目指す高等教育機関および日本語学校にとっては朗報であろうが、非漢字圏留学生の教育を担う側や受け入れ機関にとっては大きい課題となっている。例えば嶋田(2014)は、2008年から2013年にかけて日本語学校で学ぶベトナム人留学生が14倍、ネパール人留学生が6倍に増加する一方で、現場の日本語教師からは「日本語の習得が遅く、初級を繰り返し学習する学生が増加した」ことに加え、「学習意欲が低い上、受け身の姿勢の学生が多く」、「そもそも目的意識の低い学生が多く、進路相談で苦勞する」といった、学習者の動機や学習態度、進路指導についての課題が指摘された。実際に、日本語学校の留学生の多くは出身国どうしで固まり、日本語が上達しないまま専門学校や大学へと進学した結果、卒業を控えても希望通りに就職が決まらず、結局は再び大学へと進学する

ような、まさしく「就職難民」とでもよぶべき現象を就職支援現場に勤める筆者も目の当たりにしてきた。

当然のことながら、多くの留学生は大学進学後、日本での就職を夢に思い描いている。それは、筆者が愛知県・岐阜県・三重県に立地する5校の日本語学校在籍留学生を対象に行った「職業観」・「就職意識」の調査でも、約8割の留学生がいずれは日本で就職したいという希望を抱いていることから明らかである。しかしながら、「これまで大学入学のための予備教育的役割を担う日本語学校」(市嶋・長嶺, 2008: 65)において、将来のキャリアデザインを意識した就職支援やキャリア教育はなく、あくまで留学生の「進学」を中心にした進路指導が行われているのが現状であるため、留学生の「就職難民」をめぐるのは構造的な問題が存在していると考えられる。

そこで本稿では、日本語学校で日本語教育に日々携わる「日本語教師」のための、キャリアデザインの考えを取り入れた「進路指導セミナー」の事例を紹介したい。また、セミナー受講後に参加者の一部から感想をもらい、こうしたセミナーの効果についても簡単に考察する。それにより、日本語教師に対する留学生のキャリアデザインを視野に入れた進路指導の在り方を提言できるだけでなく、日本語学校における留学生の進路指導や就職支援の適切な施策について考える手がかりを示したい。

## 2. キャリアデザインの考えを取り入れた「進路指導セミナー」の実践

## (1) セミナーの概要

筆者は、日本語教師を支援する団体C<sup>2</sup>から日本語

1 『留学生30万人計画』(2008年7月29日)の骨子は、文部科学省ならびに関係省庁(外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省)によって策定されている。文部科学省ホームページの「留学生30万人計画」骨子の策定について([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm)) (最終閲覧日: 2019年9月29日)を参照。

2 日本語教師支援団体Cは、フリーランスの日本語教師が2016年に立ち上げた日本語教師を支援する団体であり、「日本語教師力1UPセミナー」を定期的開催している。本稿で取り上げた「進路指導セミナー」も、そうした一連のセミナーの一部に位置づけられる。

表1 「進路指導セミナー」の概要

開催時期	開催内容	重視するポイント	参加人数	実施時間
2017年10月7日	1. 外国人留学生の概要 (在籍数、主な進路、就職状況) 2. 留学生の進路指導の問題点 ～就労可能な在留資格の取得ポイント～ 3. 留学生の進路指導の問題点 ～大学への志望理由書の指導～ 4. 進路指導のポイントまとめ	具体的な不成功事例から、将来のキャリアを見据えたいうえで取得可能な在留資格の知識の普及が必要であることを強調する。	17	120分
2018年6月23日	1. 外国人留学生の概要 (在籍数、主な進路、就職状況) 2. 留学生の進路指導の問題点 ～就労可能な在留資格の取得ポイント～ 3. 留学生の進路指導の問題点 ～大学への志望理由書の指導～ 4. 留学生の就職事例の紹介	日本語学校卒業後すぐに日本企業で就職したい留学生のためのカウンセリング手法や、就職支援にあたって知っておくべき基本的な知識を提供する。	5	120分
2018年10月5日	1. 外国人留学生の概要 2. 留学生の進路指導の問題点 ～就労可能な在留資格の取得ポイント～ 3. 留学生の進路指導の問題点 ～自己分析のポイント～ 4. これからの授業づくりに考える	留学生のキャリアデザインを意識した授業づくりを、グループワークの「自己分析」を通して体験してもらう。	9	120分
2019年6月23日	1. 外国人留学生の「学ぶ」から「働く」への実態 2. 留学生進路指導の問題点 ～就労可能な在留資格の取得ポイント～ 3. 留学生進路指導の問題点 ～自己分析のポイント～ 4. これからの授業づくりに考える ～「自己分析」を促す授業デザイン～	就労可能な在留資格や自己分析の体験ワークを通して、今後の授業づくりをテーマの中心にして行う。	8	480分

教師向け「進路指導セミナー」講師の依頼を受け、2017～2019年で計4回分を担当した。参加者は延べ39名、主に日本語講師、日本語学校経営者または留学生の進路指導に高い関心をもつ人であった。

各回の実施時期および実施内容は表1の通りである。各回は、日本にいる留学生の現状や、留学生が日本で就職活動するにあたっての課題を提示したうえで、日本語学校で取り組む必要があることや日本語教師が日頃心掛けるべきこと、そして支援できること等を、具体的なケーススタディを交えつつグループワークから体感的に学ぶといった内容で構成された。特に、これまでの常識では「進路指導」は別に時間を取って行うものとされてきたが、そうではなく、日ごろの日本語授業のなかでキャリアデザインの考え方をいかに取り入れるかを意識してもらうよう心掛けた。

なお、各回はそれぞれ重視するポイントが異なっている。第1回目では、具体的な不成功事例から、将来のキャリアを見据えたいうえで取得可能な在留資格の知識の普及が必要であることを強調した。第2回目では、特に日本語学校卒業後すぐに日本企業で就職したい留学生のためのカウンセリング手法や、

就職支援にあたって知っておくべき基本的な知識を提供した。さらに、第3回目セミナーは第2回目の内容をふまえて、留学生のキャリアデザインを意識した授業づくりを、グループワークを通じたディスカッション方式によって考えてもらった。最終回では、これまでの3回を振り返りつつ、就労可能な在留資格や自己分析の体験ワーク、今後の授業づくりをテーマにセミナーを実施した。これは、留学生の進路指導の経験の有無に関係なく、留学生の将来のキャリアを考えるためには、いずれの参加者もまずは自己分析を行うことの大切さを体感していただくことが意図であった。

## (2) 具体的な進め方の紹介

ここでは、2019年6月23日10時～16時に開催した最終回の内容および進め方について紹介する。参加者8名が、3グループに分かれてセミナーが実施された。参加者は、日本語教育歴・進路指導歴ともに2年～20年の、進学指導を中心に経験してきた日本語教師である。

午前中には、留学生を取り巻く外部環境、日本に在留する留学生数、国籍別の割合、推移状況、日本語教育機関に在籍する留学生の人数推移および卒業

後の主な進路、その後の一般的な進路ルートや高等教育機関卒業後の就職状況を説明した後、留学生の日本での就職の壁（課題）や日本企業における独特な選考プロセスを紹介した。午後は、グループワークを中心に行った。

①グループワーク1 「留学生進路指導の問題点（就労可能な在留資格の基礎ポイント）」（30分）

具体的な2つのケースで話題提供し、そのような留学生が相談に来たとき、どのようなアドバイスをするのか、在留資格のことを考慮に入れつつ将来のキャリアデザインを意識しながら、グループで討論を行ってもらった。それらの基礎知識を説明しながら、日本語学校に在籍する留学生に知らせるべきこと、例えば就労可能な在留資格や将来のキャリアを意識づけることなどの重要性を示唆した。最後には、「留学生のキャリアデザインを考えるにあたって知っておきたい」在留資格の基礎ポイントをまとめた。

②グループワーク2 「留学生進路指導の問題点（自己分析のポイント）」（60分）

1) ワーク名

「自己分析の体験ワーク～高校時代のことを思い出してみよう～」

2) 目的

日本語教師らに自身の「高校時代のことを思い出してもらい、対話を通じて自己分析・自己理解を体感してもらうようにワークの内容をデザインした。

3) ねらい

進学指導も就職活動指導も、留学生に将来のことを意識してもらうためには、しっかり留学生自身に自分のことを理解してもらうことの大切さを伝えることが意図であった。

4) 道具、使用備品

自己紹介カード、小さなサイコロ、質問カード、付箋、マーカーなど

5) 概略

以下の流れで実施した。

【自己紹介と発表者決め】（10分）

一文字カード選びゲームを実施し、各自が瞬時に選んだカードを使って自己紹介してもらいながら、本セミナーの受講目的を語り合う。その後、発表者をグループ内で決めた。

【グループ内のワーク】（50分）

まず発表者を1人決め、6つのテーマから発表内容を選ぶ。今回は、小さなサイコロを振り、出た目の数字と同じ番号のテーマを選んで発表してもらうことにした。発表者の発表を聞いた後で、残

りのグループメンバーは「質問カード」を使って発表者に対して、例えば「どうしてそのときにそう思ったのか」や「その時どのような気持ちだったのか」と質問し、発表者に過去の経験をより深く振り返ってもらった。その後、グループメンバー全員がコメント（気づいたことや感じたこと）を付箋に書き、読みあげながら発表者に渡す。発表者は、グループメンバーからのフィードバックを受け、感想（質問やコメントされたときの気持ちなど）をメモにする（写真1）。

グループ内で順番に全員が発表したあと、各グループから1名を選出して皆の前で発表をしてもらった。発表時には、講師（筆者）から下記の2点を意識してもらうよう働きかけた。

・自分の特徴

ワークのなかで思い出したこと、感じたこと、気づいたこと。

・今の自分に繋がっていること

あるとしたら、どういったところなのかを言語化してみる。

発表終了後にももらった参加者からの感想をみると、「高校時代のことは昔過ぎて、思い出せないとの心配があったが、ゲーム感覚でサイコロを振り、質問を決めることは遊び心があり、楽しく話ができ」や、「アンサーボードから具体的な質問もあり、より過去のことを具体的に伝えることができ、過去の経験を振り返ることを体験できた」、「チームメンバーから最後コメントをいただき、肯定的なコメントが得られることがたいへんうれしく、フィードバックの大切さを実感できた」といった声を得られた。このワークのねらい通り、ゲーム感覚で過去の自分を振り返り、さらに他者からのフィードバックによって自己肯定感が高まったことで、参加者はより自信をもったようである。さらに、過去の経験と今の自分との繋がりを深く意識してもらうことによって、「自己理解」が深まるといった効果を体感してもらうことができた。



写真1 グループワーク2の様子  
(2019年6月23日、筆者撮影)

### ③グループワーク3 「『自己分析』を促す授業デザイン」(60分)

#### 1) ワーク名

「これからの授業づくりに考える～「自己分析」を促す授業デザイン～」

#### 2) 目的・ねらい

グループワーク2で体験したことをふまえ、日頃の日本語教育の授業のなかで、留学生が「自分を知る」ことや「将来を意識する」ことを促すことができるようなアイデアを出し合ってもらおう。

#### 3) 道具、使用備品

付箋(4色)、マーカー、模造紙

#### 4) 概略

以下の流れで実施した。

#### 【各自で実施】(10分)

まず、各自で「授業中に実施できるようなこと」を付箋に書き、アイデアを出し合う。1つのアイデアを1枚の付箋に書くようしてもらおう。すぐ実践できるかどうかは考えずに、とにかく思いついたことをどんどん書き出すよう促す。

#### 【グループ内シェア】(20分)

次に、各自が考えたことをグループ内でシェアしながら、類似のアイデアをグルーピングする。あえて役割を決めず、進行してもらおう。参加者の多くは日頃日本語の授業を担当している先生たちなので、進んで行う人が多かった。そのため、特



写真2 グループワーク3発表後の記念撮影  
(2019年6月23日、C団体主催者撮影)

に役割を決めなくても困ることはなく、時間内に収めることができた。授業を通じて留学生をどうサポートするか、講師(筆者)が声かけしながら意識してもらおう。

#### 【他グループの模造紙の閲覧】(10分)

自分のグループ以外の模造紙を見に行く。1名のみ残り、他グループからやってきた参加者に対して、これまで議論してきた内容を説明する。

#### 【グループ内でワークの続き】(20分)

自分のグループ以外の模造紙を見て、気づいたことやヒントになったことを参考にして、「これからの授業づくり」に使えるようなことをさらに付け足し、付箋で貼っていく。そして、グルーピングに対してカテゴリーを作り、模造紙の真ん中に、グループのテーマを決めてもらう。

#### 【発表タイム】(20分)

完成された模造紙をみながらグループメンバー全員が皆の前で発表したことに対して、他グループメンバーや講師(筆者)が質問し、全体討論しながら当日の内容の振り返りを行った(写真2)。

### 3. 受講後の感想および追跡調査

ここでは、「進路指導セミナー」を受講した者のうち6名を対象に行った追跡調査から、本セミナーの効果を検討する。今回の追跡調査対象の属性は表2の通りである。雇用状態は常勤4名、非常勤2名、日本語教師歴は2年～20年と長短あるが、常勤の方が平均の教師歴が長くなった。ただし、進路指導歴は未経験～10年までかなりまちまちである。

#### (1)「印象に残ったことや気づき」および「進路指導に対する意識変化」

受講後の感想の一部をまとめた表3によれば、6人のうち、半分の受講者(B、E、F)は第3回目「自己分析ワーク」が最も印象に残り、他者からのフィードバックによって自己理解が深まることを体感できたようである。そして、進路指導に対する意識においても「自己分析」の重要性を理解して日ごろの指導に取り入れたいと答えた人(B)や、特別な進路指導の時間ではなく、普段の授業の中で留学生自身

表2 追跡調査対象者の属性

対象者	性別	雇用状態	日本語教師歴(年)	進路指導歴(年)
A	女	非常勤	2	10
B	女	常勤	3	1
C	女	非常勤	8	0
D	女	常勤	9	3
E	女	常勤	12.5	10
F	男	常勤	20	5

(追跡調査より作成)

表3 受講後の感想①

対象者	セミナーで最も印象に残ったことまたは気づきについて	セミナーに参加し、進路指導に対する意識がどのように変わりましたか
A	学校や学部、学科の <b>授業デザインから意識して変えていく必要がある</b> ことに気づきました。	担当者が一人で進路指導をする意識ではなく、 <b>学校全体、学部、学科全体を巻き込んでいかなければならないという意識に変わりました。</b>
B	留学生の進路決定においても、やはり <b>自己分析</b> が重要であるということ……興味関心や自分の能力を総合的に考えた上で実現可能な進路を選択するべきだということがわかりました。	<b>「自己分析」の意義を理解してもらった上で実施できるよう授業の構成や内容を考えたい</b> と思いました……
C	<b>通常の授業の中にも工夫をすれば、就職に向けての練習ができる</b> ということに気づきました	初級の授業でも、 <b>将来の夢</b> などを扱い、そのあたりから日本語学校を卒業したあとのことを考えさせるようになりました。 <b>特別に時間を設けるのではなく、日々の授業から意識をさせるような練習を取り入れるようにしました。</b>
D	……どちらの学校も <b>学生の意識改革</b> を問題にされていること。	<b>学生の意識を高める</b> ことがまず大切であるということを基本にするようになった。
E	日本の就職活動が学生たちの国の就職活動とはプロセスが違うこと。何事においても、 <b>「自己分析」が必要</b> だということ	教師自身も <b>情報収集</b> をして、学生の希望に沿えるような指導を行う必要がある。そのためには、学生との日々の <b>コミュニケーション及び情報収集（学校のHP、先輩の体験談を聞くなど）が常に必要</b> である。
F	<b>自己分析の体験ワーク</b> です。ほかの参加者からのコメントにより、 <b>自分の意外な面について知ることができました。</b>	これまで進路指導と授業を分けて考えていましたが、 <b>普段の授業の中に進路指導にかかわることを取り入れることを考える</b> ようになりました。

表4 受講後の感想②

対象者	セミナー受講後に、実際の授業や学生指導のなかで具体的に実施していること、または心掛けていることを教えてください。
A	<b>簡単な自己の振り返りや自己分析の時間を取るように心がけています。</b>
B	進路決定については、教師主導ではなく、 <b>学生が自分で準備を進め、教師がそれを手助けする形を心がけてはいる。</b>
C	<b>自分の将来のことなどを書いたり話したりする練習</b> では、現実的なものを書くように指導し、 <b>進路決定などで出遅れないようなサポート</b> をするようにしています。
D	卒業後の <b>具体的なイメージを問</b> いかけ、 <b>どういう将来を描いているかを普段の対話の中に盛りこむようにしている。</b>
E	今までは卒業年次学生のみ進路指導を行っていたが、受講後は <b>日本語学校に入学後～卒業～卒業後の進路指導を計画立てて行う必要があると感じ、入学後から「意識づけ」</b> できるような授業を取り入れていくことになった。
F	作文の時間に <b>「学生時代ががんばったこと」等の「自己分析」</b> に関するテーマを取り入れるようになりました。そして、 <b>書いたものをお互いに読み、コメント</b> するようにしています。

に将来のキャリアを意識させることが肝要であると考えるに至った人（C、F）もいた。

(2) セミナー受講後に「具体的に実施していること、または心掛けていること」

次に、受講後に実施していることや心掛けていることをみると（表4）、学生自身の主体性を育みながら（B）、日ごろの授業でも「自己分析」「学生時代に頑張ったこと」といったような、日本での就職活動においても必ず聞かれる話題を出したり、日本語文章の書き方指導のなかに過去の経験を振り返ってもらう時間を設けたりしている様子が伺えた（A、F）。さらに、目先の目標（すなわち進学）だけではなく、将来どうなっていきたいのかといった「職業」イメージやキャリアデザインの考えを取り入れることで、留学生の意識改革に繋げている人もいた（C、D、E）。

(3) 「進路指導のなかで一番困っていること」

最後に、日ごろの進路指導のなかで最も困っていることや課題について聞いてみたところ（表5）、①人手不足のために一人ひとりの学生に向き合って進路指導する時間が足りない。どのように効率よく進めるか困っている（B）、②留学生自身が受け身の姿勢であり、危機感が足りない。また「勉強目的」で来日したわけではないのに進学せざるを得ないということで、進路指導の限界を感じている（A、D、E）、③在留資格の多様化にともない情報と知識不足によって留学生の相談に乗ることが困難だと感じている（C）、の大きく3つの課題があげられた。

4. 今後の課題

本稿では、日本語教師を対象に実施した「進路指導セミナー」のなかでキャリアデザインの考え方を取り入れた授業構築の重要性に加えて、日本語教師にグループワークを通して「自己分析」の手法を体感してもらうことで、特別な「進路指導」の場だけではなく日ごろの授業のなかで留学生に将来の職業イメージをもってもらうことがいかに大切か、といった気づきのための実践事例を報告した。受講後に行った追跡調査によれば、それぞれ受講後に進路指導意識の変化があり、さらに現在の授業や指導のなかでもセミナーで学んだことを実践していることがわかった。追跡調査の対象者は6人しかおらず、受講効果を一般化することはできないが、日本語教師に対してキャリアデザインを視野に入れた留学生のための進路指導の在り方にいくばくかの提言ができたのではないだろうか。また、今後の日本語学校在籍留学生の進路指導や就職支援の適切な施策についても、その第一歩を踏み出したことに意義はあっ

表5 受講後の感想③

対象者	日ごろの留学生の進路指導のなかで、一番困っていることを教えてください。
A	留学生自身が受け身の姿勢で、自分から積極的に動かなければいけないという危機感が不足していること。
B	教師として、一人ひとりの学生に向き合う時間が足りないと感じています。効率も求められるので、どうすべきか模索しています。
C	・学生の母国での学歴と、希望の職種が合うものかどうかの判断する情報がなく、学生の疑問に答えることができないことが多い。 ・入試や入学試験の時の面接指導。最近の試験の採用／合格基準が分からない。 ・どの学生にどの在留資格でビザの取得を目指すか、が分からない。 ・特定技能に興味を持つ学生がいるが、実際にどんな仕事（業務）ができるのか、単純に人手が足りない機械化されない作業を強いられるのか？など分からないので、勤めづらい。
D	なかなか高い理想を持たせられないこと。大学や専門学校のなかには、まだまだ留学生を受け入れることに消極的な学校があること。
E	・自国での進学、就職活動との相違があるので、準備に時間がかかったり、自分の思い込みで勝手に進めてしまって失敗する学生が多い。 ・目標意識を持っていない学生に対しては、意識を持たせることが難しい。 日本へは「勉強目的」で来日したわけではないのに、ビザ取得の困難さや学校の方針等で、進学せざるを得ない。
F	受験の早期化です。すでに定員に達し、募集を締め切った学校もあるため、より早い時期から進路指導を進めて行く必要があります。

(追跡調査より作成)

たとえる。

2019年4月より改正入管法が施行され、「特定技能」も含めて就労可能な在留資格が多様化することで、日本語学校留学生にとって進路の選択肢が増える一方で、どのような進路を選択すればよいのか混乱することも十分に想定されうる。しかし、人手不足のなかで日本語教師は留学生の日本語教育を主に担当しながら、留学生に特有の在留資格に関する知識・情報不足や、適切な進路指導の方法がわからないなど依然として厳しい状況である。本稿で紹介したグループワークの手法は、限られた時間で効率よく日本語教師の進路指導能力の向上をねらうことができ、同種の問題を抱えた人々にとって参考になるのではないだろうか。

## 謝辞

本稿の調査にご協力していただきました日本語教師支援団体Cの主催者の方、また追跡調査に快く応じてくださった日本語教師の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 市嶋典子・長嶺倫子(2008)『「進学指導の自覚を促す」日本語教育実践の意義—レポート分析とエピソード・インタビューを基に—』国立国語研究所 日本語教育論集(24), pp.65-79
- 嶋田和子(2014)「非漢字圏学習者に対する日本語指導法—学ぶこと・教えることの抜本的な見直し—」『ウェブマガジン留学交流』2014年12月号 Vol.45, pp. 1-16
- 独立行政法人日本学生支援機構(2019a)『平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果』
- 独立行政法人日本学生支援機構(2019b)『平成30年度日本語教育機関における留学生受入れ状況』